カント読書会　　2005 年 8 月 11 日
担当者：大田浩司

イマヌエル・カント：『純粋理性批判』(Immanuel Kant: Kritik der reinen Vernunft)

超越論的感性論　第二節　時間について

第四項　時間概念の形而上学的論究

1) 時間は経験的概念ではない。ア・プリオリな時間の表象が同時存在ないしは継起の知覚を可能にする。
2) 時間は，すべての直観の根底にある一つの必然的表象（notwendige Vorstellung）である。時間は諸現象の可能性の普遍的条件である。
3) このア･プリオリな必然性に,時間の諸関係についての確然的 (apodiktisch) な諸原則の，あるいは時間一般についての諸公理の可能性が根拠付けられている。（時間は一次元である。さまざまな時間は継起的に存在する。）
4) 時間は感性的直観 (sinnliche Anschauung) の一つの純粋形式（eine reine Form）である。
5) 時間のあらゆる限定された大きさは，その根底にある唯一で無限定な時間の根源的表象によって可能となる。

第五項　時間概念の超越論的論究

● 変化，すなわち，矛盾対当の関係にある諸述語 (kontradiktorisch-entgegengesetzte Prädikate)（例：同一のもののある場所での存在と，同じ場所での非存在）の同一の客観における結合は，時間表象を通じて初めて可能となる。時間においてのみ二つの矛盾対等の関係にある規定が、継起的に見出されうる。

第六項　これらの諸概念からの結論

a) 時間は，それ自身だけで (für sich selbst) 存立する或るものでもなければ，あるいは諸物に客観的規定 (objektive bestimmung) として結びついていて，したがって，人が諸物の直観のすべての主観的条件 (subjektive Bestimmung) を捨象しても残るような或るものでもない。
b) 時間は内的感官の形式（Form des innern Sinnes），私たち自身と私たちの内的状態の直観の形式（Form des Anschauens unserer selbst und unsers innern Zustandes）である。時間は外的な諸現象のいかなる規定でもありえず，私たちの内的状態における諸表象の関係を規定する。
c) 時間は内的現象（私たちの魂）のアプリオリな形式的条件であるが，まさにこのことに

よって間接的に外的現象の形式的条件となっている。時間は私たちの直観の主観的条件 (subjektive Bedingung) であるが，それにもかかわらずすべての現象に関して必然的に客観的 (objektiv) である。

第七項　解明

- 時間は内的直観の形式であり，諸対象自身に結びついているのではなく，諸対象を直観する主観に結びついているにすぎない。したがって，時間には経験的実在性 (empirische Realität) は承認できるが，絶対的実在性 (absolute Realität) は承認できない。
- 感性のア・プリオリな純粋形式は空間と時間だけであり，それ以外の概念（運動，変化）は経験的なものを前提としている。

第八項　超越論的感性論のための一般的注解

I.

- あらゆる私たちの直観は現象（Erscheinung）についての表象 (Vorstellung) 以外の何ものでもない。対象のすべての性質や関係は，それ自体そのものとして現存するのではなく，ただ私たちの内にのみ現存するにすぎない。
- 現実的知覚に先立ってア・プリオリに認識される空間と時間は純粋直観 (reine Anschauung) と呼ばれ，現実的知覚はア・ポステリオリに認識されうる経験的直観 (empirische Anschauung) と呼ばれる。
- 私たちの直観を最高度の判明性へともたらしたとしても，諸対象自体（Gegenstände an sich）そのものの性質は認識できない。直観における物体の表象は，対象自体そのものに帰属するものを何一つとして含んでおらず，たんにあるものの表象とこのものによって私たちが触発される（affiziert）仕方とを含むだけである。私たちの認識能力 (Erkenntnisfähigkeit) のこの受容性 (Rezeptivität) が感性 (Sinnlichkeit) と呼ばれる。
- ア・プリオリな純粋直観こそが，綜合的認識を可能にする。（例：三つの直線によって一つの図形が可能であるという綜合的認識は，経験に先立って与えられる空間という純粋直観形式から導出される。）

II.

- 外的感官を通じて私たちに与えられるのは，直観における場所（広がり）の，場所の変化（運動）の，および，この変化がそれにしたがって規定される法則（動力）の諸関係表象だけである。
- 内的直観においては，時間が外的直観の諸表象の意識に先行し，それらの諸表象を心のうちに措定する形式的条件となっている。
- 主観がおのれ自身を直観することは，おのれが内によって触発される様式に従い，おのれに現象するとおりにであって，おのれがあるがままにではない。

III.

- 空間と時間とにおいて，外的客観の直観と心の内的直観とがそれぞれの対象を表象するが，この表象は決して単なる仮象ではない。現象は，外的対象それ自体を表現するのではないが，外的対象と主観との間の関係を表現するのであり，外的対象から切り離されているのではない。

IV.

- 諸物自体の客観的形式となる直観様式（根源的直観 intuitus originarius）を所有するのは，根源的存在者（神）だけである。人間は，現象の主観的形式となる直観様式（派生的直観 intuitus derivativus)のみをもつ。

超越論的感性論の結び

- 超越論的感性論において，いかにしてア・プリオリな綜合的判断は可能であるのかという超越論的哲学の普遍的課題を解決するための必要な要件が得られた。与えられた概念と綜合的に結合するのは，時間と空間の純粋直観のうちで見出されたものである。